



第28回 国際ロータリー
日本青少年交換研究会
青森会議 2025年6月7日(土)・8日(日)

The 28th Japan Youth Exchange Conference in AOMORI

期日:2025 年6月7日(土)・8日(日)
会場:リンクステーション青森/ホテル青森
主催:RIJYEM Platform
ホスト地区:国際ロータリー第2830地区

第28回 RI 日本青少年交換研究会・青森会議報告書



会議次第

◆2025年6月6日（金）

18:30 ガバナー-NIGHT

18:30 プレコン RIJYEM

◆2025年6月7日（土）：第1日目

・地区リーダー向け青少年プログラム&危機管理セミナー

10:00 受付開始

10:30 開会挨拶：RI 理事水野功、RIJYEM 理事長上山昭治

11:55 閉会挨拶

・本会議

11:00 受付開始

12:55 参加者全員 T シャツ着用記念写真撮影

13:00 開会点鐘：ホスト地区第 2830 地区ガバナー花田勝彦

物故者追悼：RIJYEM 副理事長片山 勉

歓迎挨拶：第 2830 地区ガバナー花田勝彦

主催者挨拶：RIJYEM 理事長上山昭治

来賓挨拶：青森市長 西 秀記様 代理副市長 赤坂 寛 様

青森商工会議所会頭 倉橋純造 様

13:30 ロータリー青少年交換プログラム50周年記念スピーチ：第 2830 地区 PDG 関場慶博

13:35 日本語スピーチコンテスト決勝：地域1位6名

14:35 能登半島震災復興支援 寄付金贈呈セレモニー：D2700 より D2610 へ

14:45 基調講演：「私の海外経験談」元オリンピック選手（水泳）千葉すず 様

15:40 トークセッション（パネラー7名）：ファシリテーター青森会議実行委員長 岡山信弘

16:40 海外地区プレゼンテーション

台湾マルチ地区：TRYEX 日本窓口：林 俊宏

ブラジル：第 4420 地区 RYE 委員長：Jany HATANAKA

17:10 第1日目終了挨拶

18:00 大懇親会（JAPAN-NIGHT）

18:30 懇親会（ROTEX-NIGHT）

◆2025 年 6 月 7 日（土）：第 2 日目

09：00 危機管理・青少年交換・ROTEX 合同会議

09：50 合同会議終了

09：00 本会議 2 日目受付開始

10：00 合同会議報告：危機管理・青少年交・ROTEX

10：20 海外地区 プレゼンテーション

台湾マルチ RYEMT：洪 俊傑

台湾震災寄付感謝状贈呈：台湾国立東華大学から故近藤真道氏へ

（拝受：孫 D25700BS 候補藤井維菜）

10：50 日本語スピーチコンテスト表彰式

11：10 青少年交換研究会旗引継式：第 2830 地区から第 2700 地区へ

11：40 講評：RI 理事水野 功

11：55 閉会点鐘：第 2830 地区ガバナー花田勝彦

RYE プログラム
50周年記念 T シャツ



開会点鐘：

第 2830 地区ガバナー 花田勝彦

物故者追悼

RIJYEM 副理事長：片山 勉



今ご紹介いただきました、RIJYEM 副理事長の片山 勉でございます。皆さま、本日は近藤眞道さんを偲び、心からの哀悼と感謝の気持ちを込めて、言葉を捧げさせていただきます。



近藤眞道さんと申しますと、長年にわたり青少年交換に携わってこられた方々にとっては、言うまでもなくよく知られた存在であり、深い敬意を抱かれています。私自身にとっても、近藤さんはまさに「日本の青少年交換学生の父」と呼ぶにふさわしい方でした。

近藤さんは RIJYEM のアドバイザーを務められる傍ら、国際ロータリーの青少年交換委員会にも所属されていました。この委員会は世界でわずか 6 名の構成であり、その中のお一人として、日本を代表して活動されていたのです。まさに、日本の青少年交換のリーダーとして、国内外に多大な貢献をされました。ご逝去の後、ブラジルのイワン・リアンナさんより、丁寧なお手紙を頂戴いたしました。リアンナさんも、近藤さんと同じく国際ロータリー青少年交換委員会の委員を務められていた方です。そのお手紙の最後に、心に深く響く一節がございましたので、ご紹介させていただきます。「神と仏が彼を受け入れ、永遠の安らぎをもたらし、彼らの家族とロータリーの世界中にいる多くの友人たちに平和と慰めをもたらしますように…」

それでは皆さまとともに、近藤眞道さんのご生涯とご功績を偲び、黙祷を捧げたいと思います。

黙祷…

どうぞお直りください。

本日は誠にありがとうございました。

歓迎挨拶

第 2830 地区ガバナー花田勝彦：



改めまして皆さんこんにちは。会場席真っ赤ですね、大変いい眺めです。今日は青森の地へようこそおいでいただきました。190 名、約 190 名のロータリーアンの皆さんと、120 名の IBS・OBS・ROTEX の皆さんをお招きして、第 28 回ということになります青少年交換の全国研究会をここ青森で開催できることについては、大変光栄なことと思っております。実行委員会一同これまで一生懸命準備を重ねてまいりました。今年は、T シャツに 50 というふ

うに書いてありますけれども、RI で青少年交換が正式なプログラムとして採用されてちょうど 50 年という節目の年だと聞いております。大変歴史のある青少年交換という事業の中でこうしていろんな国の今日もいろんな国の出身の皆さんをお招きできて大変嬉しく思います。

今日の本会議のプログラムではスピーチコンテストを行います。昨年、山形で初めて行われましたけれども、今年は各地域、第 1 地域・第 2 地域・第 3 地域それぞれの代表の方 2 名ずつの合計 6 名で争われるというふうなことで、大変な狭き門を勝ち抜いてこられた優秀なスピーカーの皆さんのスピーチを聞けるということで我々も非常に楽しみにしております。その後は、千葉すずさんの基調講演をいただいて、さらには ROTEX・IBS・OBS の皆さんたちとトークセッションが予定されているということで、こちらも大変楽しみなプログラムというふうなことになるかと思います。懇親会では 20 歳以上の参加者の皆さんと 20 歳未満の皆さんが別れてということになりますけれども、その前にマグロの解体ショーや青森ですからねぶたばやしのアトラクションもご用意させていただいております。本会議が終わったらそちらもぜひ楽しんでいただければなというふうに思っております。その上で皆さんにお願いなのですが、今日は高校生の年代の皆さんが中心の研究会でございます。子供たちの安全を、まずは皆さん 1 人 1 人で守って思い出に残る有意義な大会にしたいというふうに思っておりますので、是非お 1 人・お 1 人のご協力をよろしくお願いいたします。今日明日の 2 日間、有意義な楽しい大会にしたいと思います。ご協力お願いします。どうもありがとうございました。

主催者挨拶

RIJYEM 理事長上山昭治：



改めまして皆さんこんにちは。RIJYEM の理事長を務めております上山昭治でございます。RIJYEM は正式名称を言いますと、一般社団法人国際ローター日本青少年交換多地区合同機構という、大変長い名称でございますので、英語の頭文字として RIJYEM ライジエムと称しております。私の所属クラブは、第 2580 地区東京武蔵野中央ロータークラブでございます。よろしくお願いいたします。まずもってこの度の日本青少年交換研究会青森会議の開催に、ご尽力いただきましたホスト地区のただいまご挨拶なさった花田ガバナーはじめ皆さん本当にありがとうございます。おかげさまで、このような大会を開くことができました。また本日は来賓席に青森市の副市長さん、それから青森商工会議所の倉橋会頭、それから青年部の川村様、ご出席いただきましてありがとうございます。またローターからは RI 理事の水野功様にも出席していただいております。改めて感謝申し上げます。ありがとうございます。

さて今、花田ガバナーがお話してくださったように、今年は青少年交換プログラムが RI の公式プログラムになって 50 年という節目の年でございます。この節目の年にあたり、このプログラムの歴史を改めて見ると同時に、未来に向けて新たな一歩を踏み出す機会にしたいと思っております。詳しいことは、このパンフレットに私、書いておりますので、後でゆっくり読んでいただければと思います。全部読むと長くなりますのでご覧

ただければと思います。その 50 年の間青少年交換プログラムは、日本と世界を繋ぐ架け橋となり、多くの若者が異文化への理解を深め、友情を育んでまいりました。コロナにより一時中断いたしましたが、現在では本日も多数の来日学生が来ておりますけれども、コロナ前の約 85%回復しており、また活発な交流が行われております。今回青少年交換青森会が開催されるにあたり、インバウンドの方を含めて約 300 名の方が参加していただいて、50 周年をお祝いいたします。これは単なる記念ではなく、青少年交換事業の更なる発展を目指す重要な場になると思っております。プログラムの核となる理念は、お互いの文化を理解し、尊重し合いながら、親善大使として行動すること、そしてその先にあるのは、世界平和でございます。現在、残念ながら世界各地で紛争が続いておりますが、私達はこのプログラムに参加した若者たちが、平和の架け橋となることを心より願っております。また、青少年交換の経験を通じて、多様性の理解を深めた若者たちが、未来の国際社会のリーダーとして活躍することを期待しております。50 年の歴史を祝い、皆さんとともに新たな 50 年の歩みを進めたいと思っております。結びに、改めまして、本日の青森会議に開催にご尽力いただいた第 2830 地区の皆様へ、改めて心より感謝を申し上げるとともに、この青森会議が皆様方にとって実り多い会議になることを心より祈念申し上げまして、理事長の挨拶をさせていただきます。ありがとうございました。

来賓挨拶

青森市副市長 赤坂 寛西 秀記 様



皆さんこんにちは。青森市副市長赤坂 寛と申します。本日はこの青森会議の開催、誠にありがとうございます。そして北国青森でございますけれども、今日は初夏のような日差したっぷりで、皆様をお迎えすることができたこと大変嬉しく思っております。今日、西市長ですね、あいにく公務が重なりまして、こちらの方に駆けつけることができませんでした。私、市長からメッセージを預かって参りましたので、大変僭越ではございますが、代読をさせていただきますと存じます。

「本日、第 28 回国際ロータリー日本青少年交換研究会・青森会議が日本全国のロータリークラブの皆様および多くの青少年交換留学生の皆様や、ロータリー学友の皆様のご参加のもと、このように盛大に開催されますことは、誠に喜ばしく、心よりお祝いと考えを申し上げます。皆様ようこそ青森にお越しくださいました。花田地区ガバナーを初め、会員の皆様におかれましては、個性輝くロータリーを第 2830 地区のスローガンに掲げられ、自分自身の個性を十分に発揮しながら、他者の個性も同様に重視する思いやりのあるロータリーを目指し、世界に目を向けた奉仕活動を続けてこられました。また、国際ロータリー青少年交換プログラムが、今年で記念すべき 50 周年を迎えられ、ボランティア活動や海外の会員との交流を通じて、これまで多くの青少年に異文化を理解し、国境を越えた友情と信頼を築く機会を提供し続けてこられましたこと、これもひとえに国際ロータリーとして、また会員の皆様、個人としての熱意と努力の賜物であり、心から敬意を表する次第であります。

本日のプログラムございます。来日学生、日本語スピーチコンテストや水泳のオリンピック千葉すず氏による基調講演会、そして夜の大懇親会を通して、皆様が親睦と絆を深められ、楽しい時間を過ごしていただきたいと思っております。今年開港 400 年を迎えるここ青森市には、陸奥湾や八甲田連峰に代表される雄大な自然、世界文化遺産、北海道北東北の縄文遺跡群を構成する三内丸山遺跡や小牧野遺跡、リンゴや八甲田牛など、多彩な食材や地酒の魅力的な自然資源がたくさんございます。ぜひともこの機会に、青森ならではの豊かな恵みをご堪能いただき、皆様の良き思い出の一つに加えていただければ幸いに存じます。結びに、国際ロータリー日本青少年交換研究会青森会議にご参加の皆様方のますますのご発展とご健勝を心から祈念申し上げまして、私の挨拶といたします。令和 7 年 6 月 7 日、青森市長西秀記」代読でございました。本日は誠にありがとうございます。ありがとうございました。

青森商工会議所会頭倉橋純造様



こんにちは。ただいまご紹介を受けました青森商工会議所の倉橋でございます。地元経済界を代表して、「皆さんようこそいらいしやいました」と言いたいと思っております。今副市長のお話ありました、青森の恵み、特に酒なのですけども、我々は夜の部を楽しみにしておるわけですが、青少年が多いわけなのでそこは住み分けをきちっとして、美味しいものはたくさんございます。ただ問題なのは、地元の人間がこのありが

たみをよくわかってない、非常に問題です。これ各地そうだと思うのです。我々、観光客から、逆に青森のいいところを教えてもらうということは非常に多いわけですし、今日こういう全国、世界から皆さんがお集まりということは、我々としても非常に緊張とそれと期待をしているところでございます。まず青森の人間は奥ゆかしいです。自分からも言いません。何とか声掛けしてですね、青森の人間として一歩でも近づいてもらいたいなと思っております。

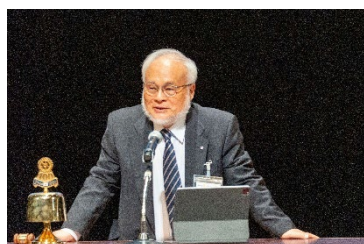
交換留学生のこの事業でございますけども、実はね、私事でございますけども、高校時代狙っていたのですよ、留学を。インターアクトで我が高校から 2 人手を挙げまして、私落選したのですね、そのとき。今でもちょっと苦しみというか、あのときの屈辱って今でも忘れられない。多分ね、あのとき私留学していたら、こんな男でなかった。もっと教養豊かな知性豊かな、そして人を思いやる気持ちを持ち備えた人間になってたはずなのですけども、今日にいらっしゃる皆様は、そのチャンスに恵まれたということで、非常に感慨深いものがあります。そしてさっきロータリーアン以外は着席って言われましたけども、実は 2 年前まで私もロータリーでした。22 年間お世話になったのですけども、「会頭やれ」って言われてですね。不器用なものですから、二足のわらじはとても無理だということで、ちょっと今休んでるというかそういうことになっています。あと何年かすると、フリーになりますのでそのときにまた声掛けしてもらえればありがたいなと思っておる次第でございます。

この青少年交換プログラムというのはですね、非常に結果が先なんですよ。下手すりゃ 20 年 30 年先にこの効果が現れるものだと私は思っています。いろんな人がやりますけども、短期間のうちに良い結果とその皆さんに提示するなんていうんですかね、そういうものを要求されるんですよ。でもこれはね、あの長い

目で見てでも先行投資ってのはこのことだと思うんですね。ながい目で見て、この国そこの世界を、今おっしゃっていましたが、平和な、そしてまともな世界を築くためには、やっぱり交流が必要だなと感じる次第でございます。最後になりますけども、こういう大事業をこの青森市で開かれるっていうことのこの我々の幸せ。そして、これがもっともっと日本全国から世界で伝播できるような、そういう時代が来ればいいなと心から思っております。以上経済界からの挨拶に変えさせていただきます。本日は誠にありがとうございました。

青少年交換50周年記念スピーチ

第 2830PDG 関場慶博：



どうも皆さんこんにちは。この青少年交換プログラムを愛しているロータリーアンの皆さん、そして青少年交換学生の皆さん、また関係者各位の皆さん、今日は本当にお会いできてとても嬉しく思います。この青少年交換の全国的な大会は、毎年行われていますけども、私が記憶するところでは、この青森会議は2003年に私が当時まだガバナー会青少年交換委員長を務めたときに、ここ青森でやらせてもらった、そのときの思い出がすぐに蘇ってまいります。その時は、沢山の皆さんが全国にいらっやってくさったのですが、中でも、当時の国際ロータリーの会長のビチャイ・ラタクルさんが急にそういう青少年の素晴らしい会議をやるのであれば、ぜひ自分も参加したいということで急遽ここに来ることになりまして、我々実行委員会としても来てもらえるのは嬉しいんですけども、やはりそのおもてなしに四苦八苦した思い出がありますし、またちょうどそのときは台風だったんですね。それで多くのロータリーアンが、幹線に乗り換えたりして青森まで来てくださったのですが、奇跡的にラタクルさんが乗った飛行機が無事、青森空港に時間通りにつきまして、本当にその1便だけが到着したという、そんな思い出があります。50周年ということで、私にこのお話する機会を与えてもらって本当にありがとうございます。

青少年交換プログラム、1927年デンマークのコペンハーゲン RC から始められたこのプログラムですけども、もちろん当時はもう98年前にありますから、当時はロータリーアンの子弟をその近隣の国々と夏休み等を利用して短期での交換ということから始まっています。2年後にはフランスのニース RC がその後続いて、プログラムにだんだん人気が出てまいりまして、各国で青少年交換プログラムが展開されるようになります。ところが私達人類は、残念ながら1930年代後半から1945年まで第二次世界大戦ということで、大変不幸な思いをするわけです。その間、皆さんご存知のように、日本のロータリークラブも敵国アメリカの発祥のクラブであるということで解散を余儀なくされます。そんな中1945年に終戦を迎えて1949年日本もまた国際ロータリーに復帰するということでした。そして1962年日本から最初の青少年交換学生がまさに戦争後17年経って、わずか17年、日本から初めての青少年交換学生宮崎陽子さんがオーストラリアの方へ交換学生として引き受けてもらうという経緯がありました。戦後17年といいますが、もうまだまだ戦争の傷跡が深く残る時期です。日本とオーストラリアは敵として戦いまして、日本人もまたオーストラリアの人も戦場で倒れた人も沢山いたわけです。敵国のそういった感情が残る中、かつての敵国であった日本から1人の高校生がオーストラリアに行くということは、どうであったかと、皆さん想像していただきたいと思うの

です。その時にいった宮崎洋子さんも素晴らしい勇気の持ち主だと思いますし、また彼女を受け入れたオーストラリアビクトリア州のローズバート RC、そこも素晴らしい。そして、もちろんそのローズバート RC のメンバーは、そんなかつて敵国であった国からの交換学生は、受けられないという方が大多数を占めていた。しかし、その中でドナルド・ファーカーさんという 1 人のロータリーアンが 1 人 1 人を説得して、もう敵も味方もないだろう、お互いが友情を育む時代だということで説得して迎え入れてくれました。ただドナルド・ファーカーさんは、実は日本との戦争の中で、日本軍の機銃掃射を浴びて視力を失っていた、そういう方でした。しかしそういう方が率先して日本の子供を、高校生を受け入れたという、そういうことはまさにロータリーの真髄そのものではないかという、そのように思うわけです。その後、この青少年交換プログラムはますます発展して、そして 1975 年の 1 月に国際ロータリーの正式なプログラムということになる訳であります。

そして今日ですね、私が 2003 年にやったときの大会を比べてみると、こんな素晴らしい旗があったり、なんかすごいなと思って見ているところなのですが、やはり今日のこの RIJYEM というものを、今日も RI 理事がお見えですが、私のときはそんなに沢山いらっしゃらなかったような気がしますけど、ここまで発展してきたその歴史的な経過というものを簡単にだけですね、時間あんまりありませんけども、やっぱり述べざるを得ないと思います。

青少年交換プログラムは、基本的にはクラブ対クラブのプログラムです。ただやはり便宜上、現在では地区対地区ということで交換が実施されているのが現状だと思います。今から 30 年前とかなりますと、例えば地区でかなりの温度差がありました。この交換プログラムは、例えば言葉の問題であるとか、あるいは外務省、法務省との折衝とか、あるいはビザの問題とか、あるいは外国の地区との交渉においてはやはり、言葉の力ではだいた必要とされます。また、実際地区で設定しても、そこに送る相手がいなければ、相手地区がなければどうしようもない訳ですね。そういう意味での人脈、そういったことを考えますと、地区においてそういう力を持っている青少年委員長の地区は大変活発であるけれども、そうでないあまりそうでもない地区は、交換プログラムがうまくいかないというようなことがありましたので、それではまずいということで 1971 年に、在日ロータリー青少年交換連絡事務所というのが米山の奨学会内にできます。そういう経緯がありますけれどもただですね、ガバナーが 1 年交代なのに地区青少年交換委員長というのは、そういう特に力のある青少年交換委員長は 5 年も 10 年もやる訳ですね。そうしますと力関係といえますか、そういったこともあって、様々な問題を抱えていたのです。そこで私もいろいろ感じるころあって、自分も青森県のこの地区で 6 年ほど青少年交換委員そして地区の委員長とやって、そしたらこんなことでガバナーになっちゃったものですから、自分としてもやはりここで今日本の青少年交換の組織というものを立て直していかなければ、今後やはりうまくいかないだろうと思いましたので、そこで東京の青少年交換連絡事務所というのを解散して、ガバナー会の中に青少年交換委員会を設けることにいたしました。

それがガバナー会青少年交換委員会 Japan Youth Exchange Committee と称しました。JYEC ですね。これが 2000 年の 7 月 1 日のことあります。そして順調に各地区の青少年交換プログラム進んでいくのですが、ところが危機管理という問題が出てまいりまして、地区あるいは地区青少年交換委員

会の法人化という問題が出てきました。日本においては各地区や各地区青少年交換委員会を法人化するってことはとても不可能な話です。それをクリアしなければ日本で青少年交換プログラムに参加できないということでしたので、このガバナー会青少年交換委員会の下に、RI 指針検討のための委員会を作りました。ここで委員長になってくれたのが D2760（愛知）名古屋大須ロータリークラブの神田 憲さんです。そして3年間一生懸命やってくれて、そのRIが要求する諸条件を全部クリアしまして、2009-10年度に、ガバナー会青少年交換委員会を解散して、RIJYEC ライジエックというものに機能を全て移しました。そしてその後、このようにRIJYEMというような形に発展していっているのが現状であります。

私は青少年交換を通してたくさんの友人のロータリアンがいますけれども、特に盟友と呼べる人は、先ほどのRIの様々な問題をクリアしてくれた小委員会委員長を務めてくれた名古屋の神田 憲、そしてもうひと方は、この近藤真道さんです。先ほど皆さんで黙とうを捧げました。近藤真道さんは大変大きな病気を実はベニスに滞在中されまして、九死に一生を得て日本に帰ってきて大手術を受けられて、そこから復帰されて、そしてその後日本のRIJYEMの発展のために最後まで尽くしてくれた。まさに自分の生涯を青少年交換のために捧げたような人です。本来であれば今日ここで近藤さんと私とで対談する形でということだったらしいんですが、残念ながら彼は去年2024年7月2日に亡くなりました。でも彼は、きっと天から私達を見守ってくれていると私は信じております。

80年前に私達は第二次世界大戦ということで経験しました。そのような戦争が2度と起きてない、起きて欲しくないということも、そのために私達は国際理解、国際協力、国際親善というものが大事であるということで国際連合、あるいはユネスコというものを作っていく我々ロータリーあの先輩もそれにたくさん参加していきました。しかし、ご存知のように、世界平和への道のりは決して平坦なものではなく、その後も戦争、あるいは内紛・テロまだまだ続いているのが現状であります。しかし私達のロータリーの創始者であるポールハリスは、「私はためらうことなく断言できます。世界平和は達成できる。友情・寛容・人の役に立つというロータリーの堅固な土台の上に平和を築くなら、恒久的なものにすることができます」という具合に彼は言っています。

今日ここにいるロータリーの若い国際親善大使である青少年交換学生1人1人が、1人でも多くこの地球上で活躍することが国際理解・協調そして親善を前進させる大きな力になると…。それが世界平和に至る道の一つだと私は確信しております。ロータリーの皆様が今後もこの青少年交換プログラムを支援していただくことを心より祈念して、私の挨拶といたしますけれども最後に、ビチャイ・ラタクルさんが来てスピーチしてくれたとき、そして最後に言った言葉を皆さんにお送りして終わりたいと…。ビーバ ロータリー、ロータリー万歳です。どうもありがとうございました。

日本語スピーチコンテスト（発表者6名）

日本語スピーチコンテスト（決勝）

出場者紹介

第1地域

- Samira Mueller（スイス／ホスト2770地区）
- Melissa Delli Poggi（イタリア／ホスト2800地区）

第2地域

- Aja Helena Reiche（ドイツ／ホスト2750地区）
- Ella Valentina Mironescu（カナダ／ホスト2610地区）

第3地域

- Alicia Ivaylova Durcheva（カナダ／ホスト2720地区）
- Helena Yumi Ledesma（ブラジル／ホスト2700地区）

審査員紹介

審査員は以下の5名：

- 水野 功 氏（国際ロータリー理事／審査委員長）
- 花田勝彦 氏（第2830地区ガバナー）
- 関場慶博 氏（第2830地区PDG）
- 上山昭治 氏（RIJYEM理事長）
- 鈴木奈々江 氏（第2530地区ローターアクター）

審査は事務局が配布・回収する審査用紙にて行われ、結果発表と表彰式は翌日の閉会式。

来日学生日本語スピーチコンテスト（各人のスピーチ内容要約）

スピーチ①：Alicia Ivaylova Durcheva（カナダ／ホスト第2720地区）



留学体験と文化の違い

- 日本到着当初は「珍しい存在」として見られ、言語・文化の壁に戸惑いながらも、学校生活や部活動を通じて徐々に適応。
- 「マジそれな・・・」などの流行語を覚え、Google 翻訳に頼りながらも、失敗を笑いに変える力を身につけた。
- たいやき屋で道を聞けるようになったことを例に、言語習得の喜びを語った。

好奇心がつなぐ心

- 真のつながりは「慣れ」ではなく「好奇心」から生まれると強調。
- 他者を理解しようとする姿勢、質問する勇気、異なる視点を持つことの大切さを語った。
- 間違いを恐れず挑戦することで、成長と絆が生まれると実感。

ホストファミリーとの絆

- 熊本のホストファミリーに「家族」として迎えられた経験が、文化理解と友情の深まりにつながった。

- 一緒に料理や祭りを楽しみ、日々の会話を通じて共通点を見つけていった。
- くしゃみの言い方や雨の違いなど、文化のユニークさを笑いとともに紹介。

文化大使としての役割

- 日本で学ぶだけでなく、カナダの文化を伝える「文化大使」としての意識を持って行動。
- 誤解や偏見を乗り越え、相互理解を深めることの重要性を語った。
- 日本の温かさや思いやりを世界に伝えたいという強い思いを表明。

メッセージと未来への希望

- 「世界中の人々を他人ではなく、友達として見る未来を築きたい」
- 雨に濡れても、言葉に迷っても、挑戦し続けることで架け橋になれると語り、スピーチを締めくくった。

スピーチ② : Maja Helena Reiche (ドイツ/ホスト第 2750 地区)



ホストファミリーとの日々

- 日本での生活はホストファミリーの温かい支えによって始まり、日常会話や日本食を通じて文化に触れる機会が広がった。
- 特に納豆が大好きになり、「最初は怖かったけれど、今では毎日食べたいほど」と語るほどの変化があった。

文化体験と御朱印帳

- 初詣で神社を訪れた際の混雑に驚きつつ、日本の伝統文化に興味を持ち、御朱印帳を購入。
- 関東を中心に、宮島・厳島神社や京都・伏見稲荷などの御朱印を集め、記録として残すことに喜びを感じている。

留学を通じた成長

- 日本での生活を通じて、自発性や計画性、コミュニケーション力が大きく向上。
- 日本語や文法、神道、日本の学校制度など、日々新しい学びに触れている。
- 「日本は故郷のように感じる」と語り、心の中に日本が根づいていることを実感。

仲間との絆と感謝

- 同期の留学生たちとの友情や、ソーラン節を踊った思い出など、かけがえのない絆が築かれた。
- ホストクラブやホストファミリーへの深い感謝を述べ、「この 10 ヶ月間は人生で一番面白い時間だった」と締めくくった。

スピーチ③ : Ella Valentina Mironescu (カナダ／ホスト第 2610 地区)



行き先のわからない旅から始まった留学

- エラさんは、行き先が決まっていない状態で交換留学プログラムに応募。
- どの国に行くのかな」と想像するワクワクと、「馴染めるかな」という不安が入り混じる中、日本への派遣が決定。
- 漢字や言語への戸惑いを抱えながらも、少しずつ生活に慣れていった。

日本での暮らしと心の変化

- 弓道部への参加や友人との交流を通じて、日本での生活が「ただ住んでいる」から「ここにいる」感覚へと変化。
- ホストファミリーは「他人」ではなく「本当の家族」と感じるようになり、日々の小さな習慣が「第 2 の故郷」を形づくった。
- 「夜 9 時に外出しないことさえ好きになった」と語るほど、日本の文化に馴染んだ。

アイデンティティと気づき

- 「私は日本人ではないけれど、本当にカナダ人なのかな？」と、自身のアイデンティティに対する問いが生まれる。
- 留学を通じて、自分の半分はカナダに、もう半分は日本にあると感じるようになった。
- 帰国は「家に帰る」だけでなく、「家を離れる」ことでもあると語り、別れの寂しさと感謝を表現。

平和への願いとロータリーの理念

- 国境を越えた友情と信頼を築くことが、世界平和への一歩になると実感。
- 「ロータリーの理念は、私たちを通して広がっていく」と語り、自身の経験を多くの人と分かち合いたいという思いを強調。
- 「日本が私を変え、私はその第 2 の故郷を心に持ち続ける」と締めくくった。

スピーチ④ : Melissa Delli Poggi (イタリア／ホスト第 2800 地区)



留学への憧れと夢の実現

- 幼少期から日本のアニメやキャラクターに親しみ、日本への留学を夢見ていた。
- ロータリーの支援により、その夢が叶い、山形での生活がスタート。
- 実家では「寿司」「わさび」「醤油」という名前の猫を飼っているという、ユニークなエピソードも紹介。

道に迷った日と“笑顔”の力

- 来日直後、学校帰りに道に迷い、近くのおばあちゃんに助けを求めた経験を語る。
- 山形弁が理解できなかったが、おばあちゃんの笑顔に安心し、記憶を頼りに無事帰宅。
- 「言葉が通じなくても、笑顔があれば気持ちは伝わる」との気づきが印象的。

未来への想いと人生の交差点

- 将来の職業はまだ未定ながら、医師として人を助ける道や、イタリアと日本をつなぐ仕事への関心を

語る。

- 人生の選択に迷ったときは、あの日のおばあちゃんの笑顔を思い出し、心を落ち着けて進んでいきたいと締めくくった。

スピーチ⑤：Samira Mueller（スイス／ホスト第 2770 地区）



ホストファミリーとの生活

- スイスでは末っ子だったが、日本では長女として家族の役割が変化。
- 下の子の世話を通じて、母親の気持ちに共感するようになった。
- 朝から夜まで生活を共にすることで、深い絆が育まれている。

日本文化への驚きと感動

- 日本の清潔さ、安全性、そして人々の思いやりに感銘。
- 靴を脱ぐ習慣や、暗めの服装、電車内での静けさなど、文化的な特徴を

紹介。

- 道に迷った際も、日本人が親切に案内してくれた経験を語った。

日本人の「あるある」

- 英語のフレーズを使うが意味を知らない人が多いことに驚き。
- 新しい友達を作るときに血液型を聞く文化に興味津々。
- 自身は O 型で、「何型に見えますか？」と会場に問いかける場面も。

スイスへの想いと日本への愛

- 日本での体験をスイスの家族や友人にたくさん伝えたいと語る。
- 「違いがあるからこそ面白い」と、日本文化への深い愛情を表現。
- スピーチの最後には「日本が大好きです」と力強く締めくくった。

スピーチ⑥：Helena Yumi Ledesma（ブラジル／ホスト第 2700 地区）



日系コミュニティからの出発

- ブラジルの日本人コミュニティで育ち、日本文化に親しんでいたため、日本留学に特別な意味はないと思っていた。
- しかし、実際に日本で暮らすことで、文化の奥深さや生活習慣の違いに驚き、改めて日本を知る旅が始まった。

書道を通じた自己表現と気づき

- 書道の授業で「ちりりほりりと立てりしところ」と書き、祖先が見た港の光景

に思いを馳せた。

- 中島みゆき「糸」の歌詞を通じて「一期一会」の精神に触れ、出会いの尊さを実感。
- 留学終盤には「だいたい色」という言葉を選び、別れの切なさや未来への希望を重ねた。

アイデンティティの揺らぎと統合

- 日本文化に馴染みながらも、自分は日本人なのかブラジル人なのかと迷いが生じた。

- 時間と経験を重ねる中で、両方が自分の一部であると感じ、文化的アイデンティティが統合されていった。

日常の中の発見と成長

- 日本の細やかな気配りや言葉にしないコミュニケーションに感動。
- サッカー好きや服の着替え習慣など、ブラジルの自分も再認識。
- 日本の音楽や野球観戦など、新しい習慣にも自然に馴染み、日々の体験に意味を見出した。

留学の成果と未来への誓い

- 迷いや不安もあったが、それ以上に多くの学びと絆を得た。
- 日本での時間は「成長の証」であり、心に生き続ける大切な記憶となった。
- 「日本は私の心の中の故郷」と語り、スピーチを締めくくった。

◆震災復興支援 寄付金贈呈セレモニー

贈呈者：第 2700 地区国際青少年交換委員 田中勝昭氏、受領者代表：第 2610 地区ガバナーエレクト 小山英一氏、ご挨拶登壇者：第 2700 地区ガバナー 野崎千尋氏：第 2700 地区ガバナーエレクト 濱野良彦氏

募金活動の経緯と想い（田中勝昭氏）



第 2700 地区では、数年来にわたり地区大会で募金活動を継続している。

- 2025 年 4 月の大会でも、来日学生・派遣生徒予定者が協力して募金を実施しました。
- 「復興は道半ば。少しでも力になれば」との思いを込めて寄付を贈呈します。

被災地の現状と感謝（小山英一 GE）



- 地震・豪雨から 1 年半が経過した第 2610 地区では、会員数が減ることなく、むしろ増加傾向しています。
- 特に被災地の 14 クラブに笑顔が戻ってきたことは、支援の成果と強調しました。

- 高校生・大学生の進学支援を目的とした「希望の翼」奨学金制度を創設しました。

- 「皆様の温かいお気持ちは、確かに被災地に届いています」と感謝の言葉を述べました。

地道な支援の継続を（濱野良彦 GE）



- 募金活動は「地道な取り組み」であり、継続こそが力になると強調しました。
- 「皆さんと手を取り合って、力を合わせて頑張っていこう」と呼びかけ、拍手で締めくくりました。

基調講演

講師：元オリンピック選手（水泳）千葉すず様 プロフィール

元競泳日本代表の千葉すずさんは、1975 年生まれでバルセロナ五輪（1992 年）およびアトランタ五輪（1996 年）に出場しました。世界選手権では女子初のメダルを獲得し、現役引退後も講演活動や水泳指導、PR 大使など、多岐にわたる分野で活躍しています。

「私の海外経験談」



ちょっとね、私は水の中にいる方が性に合っていて、まるでカッパみたいなものなんです。陸に上がると、どうも調子が出なくて。なので、座らせてもらいますね。すみません。それから、皆さんは海外から帰ってきたんですね？それは本当に素晴らしいことです。今ね、私たちの世代、そしてもっと上の世代もそうですが、海外に対する憧れがとても強かったんですよ。私もその一人でした。今の若い人たちだけじゃありません。おじさんもおばさんも、就職活動の最後の最後まで、「海外に出て挑戦してほしい」と思っているんです。今日はね、元氣が出るような話をしようと思っています。ちょっと早口になりますけど、大丈夫ですか？2 倍速くらいで話すかもしれませんが、皆さん、ついてきてくださいね！

私は水泳をしていました。オリンピックには 2 回出場しています。スペインのバルセロナ大会と、アメリカのアトランタ大会です。1996 年ですね。実家は仙台なのですが、小学 6 年生のときに思ったんです。「東北におったら早くならねえ」と。それで決めました。「大阪行く！一旗上げたる！」と。それから大阪に引っ越して、しっかり根を張って、今ではすっかり関西の人になってしまいました。11 歳から高校まで、大阪にある近畿大学系列の中学校に通っていました。そして高校 3 年生になって進路を決める時期になり、付属校だったのでそのまま近畿大学に進学しようかなと思っていたんですが…。でも、水泳人生って本当に短いんです。野球選手やゴルフ選手のように、30 代や 40 代まで続けられるスポーツではありません。とても短いんです。

だから私は、「どうせ一度の人生やし、関西から東京の賢い大学に水泳留学したろ」と思って、関東に進学することを決めました。すると、担任の先生に言われました。「千葉、お前はどこの大学に行くつもりだ？偏差値がないぞ。点数も足りない。どこにも行けないぞ」と。授業中でしたが、もう我慢できなくて、校長先生のところへ直談判に行きました。「点くれ！偏差値つくって！」とお願いしたら、校長先生に言われました。「千葉、それは犯罪だ」と。校長室を出た瞬間、頭の中はぐるぐるでした。「どうしよう…でも、あの大学しか行きたくないし…」と悩んで。そして思ったんです。「その大学行かれへんのやったら、代わりになる大学は日本にはない。ほな、国出るしかないやん」と。校長室を出た瞬間に決めました。「ほな国出よう！」と。少し頭が冴えすぎていたかもしれませんが（笑）、もうアメリカしかないとって、教室に戻るまでにアメリカ行きを決意していました。

そして担任の先生に伝えると、先生は「寿命が縮まる」と言い出して、「お願いやからまともに生きてくれ」と言われました。なんだか、もやみみたいな話をされて（笑）。でも当時の日本のマスコミは、スポーツ選手が海外に行くなんてありえないという風潮だったんです。今のようにサッカーやバドミントン、野球の選手が海外に行くのが当たり前ではありませんでした。だから私が「アメリカに留学します！」と言った瞬間、マスコミが一斉に「失敗するだろ」「成功するわけがない」と、ものすごく叩いてきたんです。でも私は逆にテンションが上がってしまって、「もう見とけよ。土下座で謝らしたんねん！」と燃えて、モチベーションが一気に高まりました。それから担任の先生が、何度もお願いしてくるんです。「頼むから進路を国内に変えてくれ」と。私は「なんでやねん。何で海外行ったらあかんねん」と聞いたんです。

すると先生は、「千葉、この高校はマンモス校だ。1 学年に 25 クラスあって、1000 人いる。でな…千葉、お前の成績は英語だけじゃない。全教科で…3000 番だ」と言われました。「は？」ってなりますよね。そもそも 1000 人しかいないのに、どうして 3000 番になるんだって、もう意味がわからないですよ。でも、仮に 3000 番だったとしても、「3000 番は海外行ったらあかんのか…？」と聞いたんです。そしたら、「すずのお前が使う日本語は下手で汚いし、英語なんてもっと無理だ」と怒られました。でも私はもう決めていたんです。「アメリカに行く！」と。それに、中学・高校で英語の授業は受けていたはずなのに、高校 3 年のときにはもう一言も話せなくなっていたんです。教科書を開いても、テスト用の英語ばかりで、「こんなの絶対に外国の人は言わないだろう」という言葉ばかり。主語、助動詞、語順…もう意味がわからなくて、まったく受け付けられませんでした。それでも、「アメリカに行く！」と決めたので、卒業してすぐに海を渡りました。勢いだけで。「行けば話せるようになるだろう」と思っていたんです。

…ところが、現実とはまったく違いました。とんでもなかったです。本当に、「ちゃんと勉強しておくべきだったな〜」と思いました。でも逆に、まったく勉強していなかったことが、私にとってはプラスになったんです。少し変な言い方かもしれませんが、まるで赤ちゃんのような状態でゼロから始められたので、変な英語を覚えていなかったんです。だから、アメリカに行ったら、英語を英語のまま覚えるようにしました。例えば、「ウォーター」という言葉を聞いたら、「水」と日本語に訳すのではなく、「ウォーターはウォーター」と、そのまま英語として脳に入れていく。日本語を介さない。それがすごく良かったんです。だから、TOEIC などのテスト用の英語は今でも全然わかりません。でも、耳で聞いて、口で話して、コミュニケーションを取るための英語は、すごく話せるようになりました。そして、海外あるあるなんです、せっかく外国に来たのに、日本人ってどうしても集まりがちなんです。語学学校でも、どこに行っても日本人同士で固まってしまう。それが私には耐えられなかったんです。せっかく海外に来たのに、なんで日本語ばかり話しているの？って思ってしまう。日本人に「日本の方ですか？」と聞かれても、全力で「ジェスチャーでノー！」って答えていました（笑）

それで私は、日本語から離れて、外国人の中に一人で飛び込んで、なるべく日本語を話さないようにして、日本の文化にも触れないようにして、「ここはアメリカなんだ！」と自分に言い聞かせながら、必死に努力しました。でも、最初は本当に苦戦しました。例えば、水泳の試合でコーチが「This race is a piece of cake」と言ったんです。「ピース・オブ・ケーキ」と聞いて、「よっしゃ勝ったらケーキもらえるで！」と思って、頭

の中はケーキでいっぱいになりながら、夢中で泳ぎました。そして優勝して、「コーチ、何ケーキくれんねん？」と聞いたら、すごく笑われて、「いやいや違うねん。“piece of cake”っていうのは“楽勝”って意味なんだよ」と言われたんです。「なんやねん！」って思いましたけど、そういう経験の積み重ねが本当にたくさんあって、いろんなことを学びました。

そんなふうに、毎日が積み重ねでした。失敗も、笑いも、すべてが経験になっていったんです。

そして、私が向こうで一番強く感じたのは、「努力した人には、ちゃんとサポートがある」ということです。

日本では、誰かしらが気にかけてくれますよね？ 放っておかれることって、あまりない。でも、海外では違うんです。自分が努力しなければ、誰も助けてくれません。本当に「自力」なんです。

例えば、日本人って「R」と「L」の発音がとても苦手ですよ。舌をぐるぐる動かさないといけなくらい、難しいんです。私も「ワールド」という言葉がうまく言えなくて、「ローラ」という名前の子がいても、話しかけるのが嫌になるくらい苦手でした。でも、友達が言ってくれたんです。「“ワールド”を 10 回言ってみて！」って。最初は舌がうまく回なくて、「今のは近かった！」「ちょっと違う！」って言われながら、次の日も「ワールド 10 回言ってみて！」って。毎日練習して、少しずつ言えるようになっていったんです。そういうのが、あちらの文化なんですよ。日本だったら「できなかったら仕方ないな」となるところですが、向こうでは「できるまでやればいいじゃん」というスタンスなんです。本当に違います。

水泳の練習もそうでした。日本では「根性！根性！」と、精神面で追い込むようなスタイルが主流ですが、アメリカでは「短時間で濃い内容をこなす」という考え方なんです。だらだらと長時間やるのではなく、集中して一気に取り組んで、さっと終わる。そこがまったく違うんです。そして、文化の違いも強く感じました。肌の色も違えば、宗教も違う。食べるものもまったく違います。クリスマスパーティーに招かれたときには、みんなを手をつないで神様に感謝してから食事を始めるんです。私はクリスチャンではありませんが、そうした文化に触れることができたのは、本当にありがたい経験でした。

それにね、関西では私のようなタイプはしっかり馴染むんですけど、関西以外の地域に行くと「変わった人」と見られることもありました。言いたいことをはっきり言うし、「日本人らしくない」と言われることもあって。でも、海外に行ったら、私以上に個性の強い人がたくさんいて、みんな自分の意見をしっかり持っているんです。だから、すごく居心地が良かったんです。見るもの、経験すること、すべてが私にとって幸せでした。それから、食文化の違いにも驚きました。試合のとき、私はちゃんとお稲荷さんとおにぎりを作って持って行っていたんです。日本人ですから、試合前にはきちんとした食事を摂りたいじゃないですか。でも、外国の選手たちは、前日に冷凍したカチカチのピザを持ってくるんです。チーズなんて、食品サンプルみたいに硬くなっていて、それをジップロックに入れて試合前に食べているんですよ。「えっ…栄養バランスなんて言葉、どこ行ったん？」って思っていたら、私のお稲荷さんを見て、外国人が言ったんです。「スズ、それ馬のフンか？」って。「なんやそれ！」って思いましたけど、食べさせてみたら「すごく美味しい！」ってなって、みんなで取り合いになって食べて、「誰や、馬のフンって言うたのは！」ってツッコみました（笑）

今でも思っているんです。「海外でお稲荷さんの寿司屋をやったら、儲かるんじゃないか？」って。ちょっと本気で企んでいます。それと、海外あるあるなんです、トイレにもびっくりしました。男子トイレには入ったことがないのでわかりませんが、外国のトイレって、ドアの下がすごく空いているんです。足が見えるし、子どもが下から覗いてくるんですよ！もう、トイレでは全然落ち着けません。ドアの隙間も大きく空いていて、外から目が合うこともあるし、そわそわしながら用を足すという経験もしました。

でもね、やっぱり一番強く感じたのは「考え方の違い」なんです。同じ人間で、同じ 24 時間 365 日が与えられているのに、考え方ひとつで人生ってこんなにも変わるんだって。実は私、一度引退しているんです。オリンピックが終わって、「もう二度と水泳なんて・・・！」と思ってやめていたんです。アメリカに残って子どもたちに水泳を教えたり、アルバイトをしたりしていました。そんなある日、2 年ほど経った頃に、たまたま友達に会って「すず、泳いでるの？」って聞かれたんです。「泳ぐわけないやん、引退してるのに」と答えたら、「なんでよ、もったいない！」って。「あと 2 年で次のオリンピックだよ？すずの種目、世界であまり伸びてないからチャンスだよ！」って言われて。「誰に言ってるんやろ、この人。引退して泳いでない人にチャンスという発想がどっからくんねん…」と思ったけど、みんなが「すずならいける！」って言ってくれるんです。

最初は「頭おかしいんじゃないかな・・・」って思ってたけど、会う人会う人に「いける！すずなら絶対いける！」って言われると、なんだか不思議と「いけるかも…」って思えてくるんですよ。本当に、言葉って魔法みたいです。「お前はダメだ」って言われると、本当にダメになってしまうし、「いける！」って言われると、なんだかいける気がしてくる。私もそうでした。「いけるわけないやろ・・・」って思っていたけど、みんなが「いける！」って言うから、「いけるかもしれない」って気持ちが湧いてきて。それで、「うるさいな！じゃあ私の衰え、見てもらおう・・・」って思って、2 年ぶりにプールに入ったんです。50 メートル泳いで、「ほら、衰えてるでしょ！」って見せてやろうと思って。でもね、水に入った瞬間、すごく調子が良くて、人生で一番“ポニョ”って感じだったんです。水の膜が張って、周りの水が全部避けていくような感覚。泳ぎ終わって、プールから上がった瞬間、アメリカ人の友達に言いました。「ごめん、3 度目のオリンピック、狙うわ」って。

すると、みんなが「わーっ！！」と盛り上がってくれて、その瞬間に思ったんです。「これを逃したら、一生後悔するやろ・・・」と。そして、復帰を決めてからは、まさに怒涛の日々でした。アメリカのコーチが「すず、地図を広げるよ」と言って、世界地図をバーンと広げてきたんです。「復帰してくれるのは嬉しいけど、チームから推薦が来ているから、そっちに行ってもらわないといけな」と言われて、「えっ、どこ？」と聞いたら・・・まさかの東海岸だったんです。西海岸じゃない。西は陽気で暖かくて、とても住みやすかったんですよ。でも東は、ナイアガラ滝の近くで、冬はマイナス 20 度にもなるんです。寒すぎるんです！「嘘やろ…知り合いもあらんし、なんでそんなところに…」と思いましたが、「これも人生のご縁だ」と思って、覚悟を決めて行くことにしました。

それからカナダに移り住み、5 年間暮らしました。アメリカの永住権も取得して、ずっと海外生活が続いてい

ました。でも、カナダの冬がまたすごかったんです。4～5 ヶ月も雪が降り続き、寒すぎて外に出るのも億劫になるほどでした。そんな中、近所のおじいちゃんやおばあちゃんたちは、冬の間だけマイアミなどの暖かい場所に住む「二重生活」をしていたんです。すごく賢いな～と思って、私も夫と「せっかくやし、一緒に最初で最後やカリブ海に行こか！」という話になりました。それで、朝 8 時にトロントを出発して、飛行機に乗ってマイアミに到着したら…空港が大パニックだったんです。

9.11 と人生観の転機

まるで映画のような大惨事でした。「何が起きたの!？」と驚いていると、意味の分からない放送が流れて、全米の空港が閉鎖されるというアナウンスがありました。私も、「今こそ耳に英語力が欲しい…」と思うくらい、何を言っているのか全然わからなくて。隣にいたおばあちゃんに「何が起きたんですか? いつまでゲートが開かないんですか? 飛行機に乗れないんですけど」と聞いたら、「なんかハイジャックされたらしくて、ペンタゴンがどうか…」と、もう訳のわからないことを言い始めて。「どういうこと…どうなるの…」と混乱していたら、私が飛行機に乗っている間に、あの 9.11 の同時多発テロが起きていたんです。

別の飛行機がハイジャックされて、世界貿易センターに突っ込んだ日でした。本当に。その後、約 3 週間カナダに戻れず、足止めをくらってしまって。もう本当に大変でした。これを語り出すと 1 ヶ月かかるので省略しますが、心身ともにしんどかったです。でもそのとき、強く思ったんです。「命があることって、当たり前じゃないんだな」と。「神様、仏様、ここまで生かしてくれてありがとう」と。「もしかしたら、あの飛行機に乗っていたのは自分だったかもしれない」と。そしてその後、東日本大震災も起きました。まさか自分の実家がある仙台にまで被害が及ぶなんて、思ってもみませんでした。

いろんなことが重なって、本当に思ったんです。「人生って、必ずしも一生あるとは限らない。老後があるとも限らない」と。だからこそ、本当に“一期一会”だと思って、「そのときに感じたことは、すぐ行動に移す」と決めました。「あのとき、ああしておけばよかった」「こうしておけばよかった」と後悔しない人生を送ろうと。そして、我が子が生まれてからは、小さい頃から学校の先生にきちんと伝えていました。「すみません、私は学校の勉強よりも、社会の勉強をたくさん経験させたいんです。安い平日にお休みをいただいて、子どもを連れて海外に行かせてもらいます」と。やっぱり、学校では学べないこともたくさんあります。もちろん、学校の勉強も大切です。でも、それ以外にも大切なことは山ほどある。しかも、「思うだけ」ではなく、「将来のために取っておく」のでもなく、「思ったときにすぐ行動に移す」。それを繰り返していけば、絶対に後悔しないと思うんです。

それでね、私、3 回目のオリンピックを目指していたんですが…ここだけの話、ちょっと性格に難がありまして。優勝はしたんですけど、代表からは外されてしまったんです。水泳連盟から外されてしまって。まあ、少し日本人離れた性格だったこともあって、そういうことも起きたんだと思います。そのあと、本当に引退して、「よし、これからは人生を楽しもう!」って思ったんです。今までの人生は、ずっと「オリンピック、オリンピック」とそればかりを掲げていて、修学旅行にも行かせてもらえなかったし、本当に面白みのない人生でした。でも、

アメリカに行って思ったんです。「自分、水泳中心すぎたな」と。振り返っても、過去には戻れませんけど。外国人の友達たちは、オンとオフの切り替えがとてもしっかりしていて、それに圧倒されたいです。頑張るときは全力で頑張る。でも、練習が終わった瞬間、背中スイッチがパチンと切り替わる。

私はというと、次の練習のことばかり考えていて、家に帰っても体を休めるだけ。すごく退屈な人生でした。朝練して、家に帰って次の練習に備えて、午後練して、翌日の朝練が早いから早く寝る。なんだか、行ったことはないけど、刑務所みたいな生活でした。でも、外国の友達は違うんです。朝練が終わったら、シャワーも浴びずに腰にタオルを巻いて、「どこ行くの?」「バスケットに行く」「サッカーに行く」「映画観に行く」って。ひどい子なんか、「サーフィンしに行くんだ」って言って。「また水かい!」ってツッコミたくなるくらい、水泳終わってまた水（笑）

私は、24 時間 365 日、水泳のことしか考えていませんでした。まるで二宮金次郎のように、いろんなものを背負って、メディアからのプレッシャーもあって、ストレスもあって…本当に大きな違いでした。でも、外国の子たちはちゃんと目的を持って、「これを頑張ったら、次はリフレッシュの時間」と、気分を切り替えて、また集中して頑張る。オンとオフの切り替えがしっかりしているんです。同じ世代なのに、同じ年なのに、私は「オリンピックに行けたらそれでいい」と、それが人生の最終ゴールのようになっていました。でも、外国の友達は学校でも専門的な勉強をしていて、「何を学びたいか」「どんな仕事に就きたいか」をちゃんと考えている。高校卒業後の進路を聞くと、「スタンフォードに行く」「ハーバードに行く」「イエールに行く」と言うんです。「嘘やろ! ? 同じ人間なのに、なんでこんなに違うんやろ! ?」って、本当に驚きました。人生のビジョンがまるで違ってたいです。自分の狭かった視野を、外国の人たちがぐっと広げてくれました。

学歴や経歴よりも中身が大事

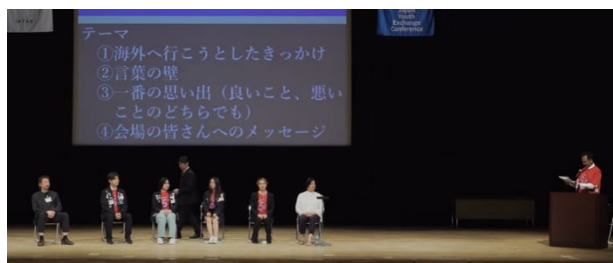
それでね、「こんなにも違うんだ」と思ったんです。生きていくうえで何が大切かは人それぞれですが、やっぱり「何を大事にしているか」という価値観が、本当に大切だと思うんです。でも、やっぱり本当に大事なものは、学歴や経歴ではなくて、「中身」なんですよ。自分がどんなボランティア活動をしてきたとか、どんなふうに勉強してきたか、どんなふうに生きたいかということを、一人ひとりがちゃんと考えている。それが、もう全然違うんだなって思いました。何か一つのことに秀でているからといって、それだけで偉いわけじゃない。それだけで食べていけるからといって、偉そうにするものでもないし、それがすごいことだと思いつくのも、違うと思うんです。やっぱり、目的を持って、ちゃんと自分で考えて、24 時間をただダラダラ過ごすのではなく、目標を持って、その意味を自分で理解して、「やらされている」のではなく「自分で選んでやっている」ということが大事だと思います。だから、私が高校などで講演に行くときには、よくこう言うんです。

「高校の次は大学」と、まるで決まっているかのような風潮があるけれど、行きたい人は行けばいい。でも、行きたくない人は、自分がしたい仕事のことや、お金のこともちゃんと考えて、大学は 4 年かかるし、その時間を無駄にしないようにしないといけないう。それを言うと、進路相談の先生がざわつくんですよ。「やめてください! 進路はもう決まってるんです!」って（笑）でもね、本当にそうだと思うんです。

若者への進路の考え方、そして「自分の人生は自分で選ぶ」という力強いメッセージ

だからね、やっぱり高校生くらいになったら、「親に言われたから」「先生に勧められたから」という理由で進路を決めるのではなくて、「自分が何をしたいのか」「何が楽しいのか」を、ちゃんと自分自身で考えるべきだと思うんです。誰かのせいにして、「あのとき言われたから…」と言っても、結局それで後悔するのは自分ですからね。環境のせいにするのも違います。「周りがそういう雰囲気だったから…」と言っても、それで納得できない人生になったら、本当にもったいない。だからこそ、自分の意思で、自分の目標を持って、「何がしたいか」「何をしていたら楽しいか」を見つけるために、自分から動かないといけないんです。夢って、向こうから歩いてきてくれるものじゃないんですよ。スーパーでセールしてるわけでもない。「本日限り！夢、半額！」なんて、そんなものはありません（笑）自分でしっかり動いて、自分で見つけて、掴みに行くものなんです。若くても、年齢を重ねていても、おじいちゃんやおばあちゃんでも、「後悔してるな…」と思う人は、今すぐ動いていいと思います。お金は、あの世には持っていけませんし、天国に銀行があるわけでもない（笑）だからこそ、元気なうちに、しっかり使って、行動に移してほしいなって、私は思うんです。

◆パネルディスカッション



ファシリテーター：岡山信弘 氏（実行委員長）

登壇者：千葉すず 氏（基調講演者）、ニコール・ジョイ・マックネビン 氏（ロータリー平和フェロー）、楠木文俊 氏（ROTEX）、柴田怜音 氏（ROTEX）、村上さくらさん

（OBS 候補生）、澤口菜月さん（OBS 候補生）

登壇者紹介と自己紹介

楠木文俊 氏：1987 年にオーストラリアへ派遣された元交換留学生。現在は公立高校の英語教員。

民間企業勤務を経て教育現場へ。娘も OBS 経験者。

柴田怜音 氏：2023 年にネバダ州カーソンシティへ留学。青森県の高校に進学し、島地区から派遣。

留学の成功はロータリーの支援のおかげと感謝を述べた。

村上さくら 氏：イタリアへの派遣予定。料理と文化への関心が高く、現地での交流を楽しみにしている。

バレーボール経験者。

澤口菜月 氏：アメリカへの派遣予定。人との交流が好きで、世界中に友達を作りたいという思いから留学を志望。八戸北ロータリークラブがスポンサー。

登壇者：ニコール・ジョイ・マックネビン 氏（第 22 期ロータリー平和フェロー）

スポンサー：第 6270 地区（米国）Neenah RC／ホスト：第 2700 地区南越谷 RC

研究テーマ：地方の若者がグローバルスキルを身につける過程と平和構築との関係



◆背景と研究の意義

青森市で 4 年間外国語指導助手として勤務した経験から、地方の国際教育に関心を持つ。

「国際教育は平和構築の予防的アプローチである」との視点から研究を開始。国際教育は、異文化理解・尊厳・敬意を育むことで、対立を未然に防ぐ力を持つと強調。

◆調査と主な発見（青森県内の高校生 412 名対象）

・グローバルスキルの障壁

最大のバリアは「経済的理由」「受験のプレッシャー」「自信のなさ」

「内向き志向」は本質的な障壁ではなく、教育環境や心理的要因が影響

・人材像とのギャップ

文科省の「協調性・社会貢献」重視の人材像と、生徒の「個人的動機」との乖離

「青森の人」としてのアイデンティティが強く、日本人としての意識は相対的に薄い

・地元愛と国際教育の関係

地域イベントへの参加や地元への誇りが、国際教育への関心を高める

ローカルとグローバルは対立せず、むしろ相互に補完し合う関係にある

◆考察と提言

現状の国際教育は「東京中心」で、地方の若者には「地域を離れる手段」として映りがち

グローバルスキルを「地域に関わり続ける力」として再定義する必要がある

地元への愛着を活かしながら、国際的な視野を育てる教育のあり方を提案

トークセッション要約（第 1 テーマ：「海外へ行こうとしたきっかけ」）

◆それぞれの「きっかけ」



・楠木文俊 氏：

1980～90 年代の洋楽や映画文化への憧れ、空手を通じた自己表現欲求から「アメリカに行ってみよう」と強く思ったことが原点。

柴田怜音 氏：

将来の夢を模索する中で「英語を使えるようになりたい」

と考え、アメリカ留学を選択。

・村上さくらさん：

家族旅行で訪れた台湾で「海外は怖くない」「人は優しい」と実感し、海外への興味が芽生えた。

・澤口菜月さん：

洋楽や英語への憧れ、中学校の ALT（フィリピン出身）との交流がきっかけ。もっと話したいという気持ち

が留学への原動力に。

・ニコール 氏：

母親とのやり取りが転機。ゲーム漬けの生活から一転、「留学に行きなさい」と言われたことがきっかけ。最初はエジプトを希望するも却下され、日本の歴史への関心から名古屋への短期留学を経験。

トークセッション要約（第2テーマ：「言葉の壁」）

◆登壇者の語りから見える「壁」と「突破口」



・楠本文俊 氏：

最初の3ヶ月は「聞くこと」に徹し、半年後に急激に言語が開けた実感。・共通の話題がない中、現地のテレビ番組を話題にすることで会話が生まれた。・「英語が話せないと彼女ができない、でも彼女がいないと英語が

話せない」という“卵と鶏”のような葛藤もユーモラスに紹介。

・柴田怜音 氏：

「英語で考える」ことを意識するようになってから、聞き取りや会話がスムーズに。・学校の成績にも良い影響があり、言語習得の自信につながった。

・ニコール 氏：

ALTとして青森で勤務中、子どもたちの率直な言葉に戸惑いながらも、繰り返し話す・発表することで壁を乗り越えた。・「ミスしても、笑われても、続けることが大切」と語り、今も挑戦を続けている。

千葉すず 氏（補足談）：

「英語で考える」ことで会話がスムーズになった経験を共有。・笑顔や表情が、言語以上にコミュニケーションの鍵になると強調。

・澤口菜月 氏：

北海道・ニセコでの国内留学で、英語環境に触れた経験から「力と笑顔が大事」と実感。・言葉が通じなくても、明るい態度が会話のきっかけになると語った。

◆共通する気づき

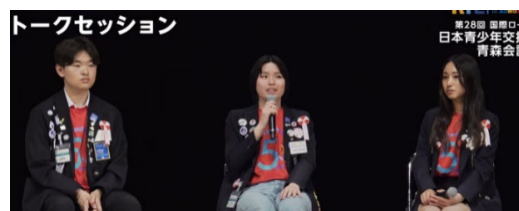
言葉の壁は「技術」だけでなく「心の姿勢」で乗り越えられる。

聞くこと・笑顔・話しかけられやすい雰囲気づくりが、言語習得の第一歩。

失敗を恐れず、繰り返し挑戦することで、言葉は“壁”から“橋”へと変わっていく。

トークセッション要約（第3テーマ：「一番の思い出」）

◆登壇者の語りから



・楠本文俊 氏：

オーストラリア留学中、昼休みに誰と食事するか悩み、誘われたグループが後に警察沙汰に。・その経験をきっかけに、常識的な友人と深い友情が生まれた。・ま

た、教師になる前の旅でキリマンジャロ登頂中に強盗に遭遇。格闘技経験で抵抗し、警察沙汰に。正当防衛と認められたが、過剰防衛の指摘も受けた。

・柴田怜音 氏：

アニメ好きの現地学生との会話を通じて、初日から多くの友達ができた。・今も SNS で交流が続いており、「友達をたくさん作ることが大切」と語った。

・村上さくら 氏：

ホストファミリーとの事前の電話で、海の近くの街の風景を見せてもらい、期待が高まった。・「楽しみたいという思いを作りたい」と語る姿が印象的。

・澤口菜月 氏：

アメリカの学校行事や友達との交流を楽しみにしている。・ホストファミリーが決まったら、事前に連絡を取り仲良くなりたいと語った。

・ニコール 氏：

青森での英語スピーチコンテスト指導が印象深い思い出。・生徒の成長に寄り添い、優勝の瞬間に「母親のような気持ちになった」と語る場面に感動が広がった。

・その他の登壇者：

ロサンゼルス空港での乗り継ぎトラブルや、裸足でダッシュして飛行機に乗り込んだエピソードなど、ユニークな体験も共有された。

会場へのメッセージ（トークセッション締め）

・楠木文俊 氏：

自身の過去を振り返り、「ロータリーがなければただのヤンキーだった」と語り、教育現場での挑戦と若者への支援を続けていることを報告。制服や髪型の自由化など、多様性への取り組みも紹介。

・柴田怜音 氏：

留学を通じて英語力と人間関係が大きく成長。大学進学も果たし、今後も国際交流を続けたいと感謝を述べた。

・OBS 生・ROTEX 生たち：

それぞれが「友達との出会い」「価値観の変化」「将来への希望」などを語り、ロータリーへの感謝と今後の抱負を共有。

・ニコール 氏：

支援してくれたロータリーアンとの交流が途絶えたことへの後悔を語り、「留学生とのやり取りはぜひ続けてほしい」と呼びかけた。

海外地区プレゼンテーション

◆林俊宏 氏（TRYEX）：現地課題への取り組みや文化交流を通じて、人間的成長を実感。交換留学の価値を再確認。

◆Jany HATANAKA (ジャーニー・ハタナカ) 氏 D4420RYE 委員長：

地区内 RYE プログラムの紹介と日本からの IBS の生徒たちが、これまでとは異なる時間（生活）の中でどのように成長し、私たちの文化や言語を学んでいるのかを示すビデオを発表。

大懇親会



青少年交換研究会 2 日目

日程：2025 年 9 月 9 日（火） 会場：青森市 司会進行：小関 氏

ROTEX・IBS 報告



柴田怜音 氏（ROTEX）・台湾出身の怜央 氏（IBS）が懇親会の様子を報告。

ダンスや乾杯、音楽を通じて国境を越えた交流が生まれたことを共有できました。「親切さに触れて嬉しかった」「日本語と英語、これからも頑張りたい」と前向きな姿勢が印象的でした。

青少年交換委員長 表彰

3年以上委員長を務めた功績を称え、RIE バッジを授与。今年は2800地区・佐藤聡委員長が対象。前日に上山理事長からご本人に手渡しをした旨の報告をした。

海外地区プレゼン（台湾）

- ・台湾 RIEMT 洪 俊傑 氏が台湾地区の活動を紹介。地理・構成・交流事業・言語教育などをパワーポイントと映像で解説。「国際社会奉仕への敬意と感謝」を強調し、温かい拍手で締めくくられた。
- ・台湾震災寄付感謝状贈呈：台湾国立東華大学から故近藤真道氏へ（代理：藤井維菜・孫）



（台湾 RIEMT 黄 元碩 (Akira)氏、D2570OBS 候補藤井維菜、RIJYEM 理事長上山昭治）

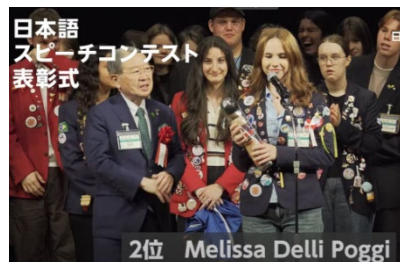
日本語スピーチコンテスト 表彰式

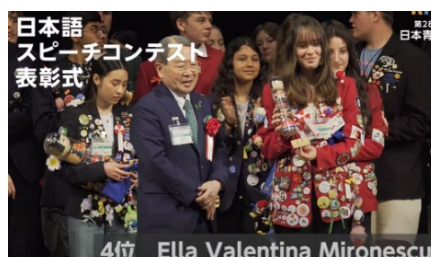


順位	氏名（敬称略）	得点
1 位	ヘレナ	459 点
2 位	メリッサ	455 点
3 位	アリシア	452 点
4 位	エラ	437 点
5 位	マヤ	432 点
6 位	サミラ	424 点

発表者 6 名がステージに登壇。トロフィーは青森・黒石市の伝統工芸「津軽こけし」。職人・安保氏による制作映像も上映。

点数発表の後、順位が決定：各登壇者が 1 分間のコメントを発表。「日本語の勉強」「ホストファミリーへの感謝」「友達との思い出」など、心のこもった言葉が並んだ。





研究会議 引き継ぎ・次年度開催地プレゼンテーション



ホスト地区：第 2830 地区（青森）
ホスト地区エレクト：第 2700 地区
（福岡・博多） 引き継ぎ式登壇
者：第 2830 地区花田勝彦ガバナー・岡山信弘実行委員長、（第
2700）野崎千尋ガバナー・大島弘
三実行委員長 他



◆引き継ぎセレモニー

第 2830 地区より、研究会議の象徴
的な「RI 日本青少年交換研究会旗」
が第 2700 地区へ正式に引き渡され
た。岡山実行委員長からの感謝ととも
に、次年度への期待が込められた温か
い場面となりました。

◆第 2700 地区プレゼンテーション（福岡開催）

大島弘三実行委員長より、次年度開催地・福岡の魅力と開催概要が紹介。

開催日：2026 年 5 月 30 日・31 日

会場：福岡市（博多）

地元の歴史あるクラブ（久留米 RC）から青少年交換第 1 号を輩出した背景も共有。「ROTEX」に焦
点を当てたプログラムを計画中。



野崎千尋がバナーより、スピーチコンテストへの感動と、青少年交換への深い思いが語られた。「ペドロくん（2025.6 ご逝去）」との思い出が、ヘレナさんのスピーチと重なり涙ぐむ場面も。「皆さんの努力に心から感謝」と、参加学生への温かい言葉が贈られた。

博多らしい締め演出

中村勇治副実行委員長による「博多一本締め」で会場を盛り上げ。「ヨーッ、ポン！」の掛け声で、来年への期待と団結を象徴する締めくり、博多祇園山笠の文化にも触れ、「博多の街でまたお会いしましょう！」と呼びかけました。



講評 水野功 RI 理事



皆さんおはようございます。2 日間延べですね。前夜祭からすると 3 日間、大変お疲れ様でございました。この開催にあたりましてご尽力いただきました花田ガバナー、岡山実行委員長を初め関係各位の皆さんに、心から厚く御礼を申し上げます。

振り返ってみますと、最初の前夜祭から昨日の千葉さんの基調講演、そしてパネルディスカッション、ねぶたエンターテイメント、まぐろ解体ショー、青森のお酒とワイン…様々な趣向を凝らしておもてなしをいただきまして誠にありがとうございました。本当に楽しむことができました。何よりも素晴らしかったのは、先ほど表彰させていただきましたけれども、青少年交換留学生の熱い思い、それぞれの考え、この留学を経て得たことをそれぞれの個性を持ってお話をいただきましたことを、本当に大変嬉しくて、本当に感動いたしました。どのスピーチも素晴らしかった。一応点数をつけなければいけませんので、ああいう形にはなりましたが、6 人の方々のスピーチ本当に素晴らしかったなというふうに思っております。今日は大勢の青少年交換留学生あるいは ROTEX の方がいらっしゃいますけれども、ぜひお願いしたいことがあります。それは先ほどなたか留学生の方が言っていましたが、あと 2 週間で帰ります。それは非常に寂しいですというお話がありました。しかし皆さんは、これから先は留学生としてではなくて ROTEX の一員として、ロータリーファミリーの一員になるわけです。今ロータリーは人数が減ったとはいっても世界 116 万人ぐらいいます。ローターアクトは 12 万人ぐらいいます。128 万人ぐらいのロータリーのメンバーがいます。皆さんは世界中のどこに行こうと、その人たちと接することができます。ロータリーバッジを付けている方と交流することができます。ぜひそのことを忘れないでいただきたいというふうに思っております。

もう一つ覚えておいていただきたいのは、ロータリーは青少年交換プログラムだけでなく、様々な奨学金

制度があります。ロータリー財団の奨学生、そして昨日パネリストにでました Pece fellow。世界には今七つの平和センターがありますけれどもそういうプログラムもあります。その他に RYLA プログラムがあります。是非、そういうプログラムにも、これから先ぜひ挑戦をしていただきたいというふうに思っています。ロータリーは宣伝が下手なのであまり知られてないのですが、例えばロータリー財団奨学生で一番有名なのは緒方貞子さん、国連の高等弁務官をされた方です。今テレビによく出てくる事務次長の中満 泉さんもロータリー財団奨学生であります。その他、コンポーザー始め、ヴァイオリニスト、世界的に有名な人々を輩出しています。是非皆さん方には、そういう人々を輩出しているプログラムがあるということ、そしてそれに挑戦してほしいというふうに思っております。

もう一つ今、非常に世界が混沌としています。ウクライナ、ガザ、そしてトランプさんの登場によってアメリカも揺れています。特に深刻なのは海外留学生を排除するハーバード大学に対する締め付けが非常に高まっています。それからもう一つは今までロータリーが一生懸命こう強調してきた DEI。これについても否定するような動きがありました。ジェンダーの問題もそうです。今まで私達が信じてきた考え方に非常に亀裂が入っているというか、分断が様々な分野で出てきています。皆さん方、この1年間通じて色々得ることが多かったというふうに思いますけれども、是非青少年交換プログラムの一番の目的が小さな親善大使としての活動ということになります。国に帰って日本で得たことを周りの方々に伝えていただいて、正しい知識を地域社会に伝えていただきたいというふうに思っております。これからもロータリーの一員としてご活躍をいただきたいというふうに思います。

次回は博多ということであります。大変私も嬉しく思っております。青森の大会は素晴らしかったですけど、私個人的に博多が大好きなので非常に楽しみにしておりますが、それともう一つ私のロータリーの理事としての年度がですね、来年6月で終わることなので、その最後のときに、是非とも博多の第29回になる研究会に参加させていただきたいというふうに思っております。次回は青森以上にまた大勢の方々と一緒に博多の夜を楽しみたいというふうに思っています。ROTEX になられた方々もぜひチャンスがあれば博多にお越しをいただきたいというふうに思っております。

最後になりますけれども、今回企画をしていただきました RIJYEM の上山理事長はじめ皆様には感謝申し上げます。また再度花田ガバナー、実行委員会の皆さん、大変ありがとうございました。本当にありがとうございました。

◆次年度 RYE 研究会・福岡会議



Rotary RYJEM RYE 第29回 国際ロータリー
日本青少年交換研究会
福岡会議 2026. 5. 30(土) ▶ 31(日)
The 29th Japan Youth Exchange Conference in FUKUOKA



●収支報告

第 28 回 R I 日本青少年交換研究会・青森会議 収支報告				
2024.6.7・8 リンクステーション青森・ホテル青森				
	実行委員長	岡山信弘		
	会計担当	津留起夫		
	会計監査	井上暎夫		
(単位：円)		作成日：	2025年6月29日	
番号	項 目	収入	内訳	摘 要
	(収入の部)			
1	前年度繰越金	39,500	山形会議	登録費単価 RT'n12,000 Youth5,000、懇親会 (RT'n10,000 Youth5,000)
2				ブレコン (G-Night 15,000 RIJYM 10,000)
3	登録費 (会議)	3,032,000		RT'n201名 (内 D2800RT'n28名) Youth124名
4	登録費 (japan night)	2,520,000		RT'n191名 Youth122名
5	登録費 (Governor night)	435,000		RT'n29名
6	登録費 (Rijyem night)	380,000		RT'n38名
7	青森MICE事業開催助成金	300,000		青親交第64号令和7年5月20日助成金交付決定
8				RI青少年交換プログラム50周年記念Tシャツ製作
9-1	利息	300		実行委員会通帳
9-2	雑収入	1,000		
	収入金額合計	6,707,800		
	(支出の部)	支出	内訳	摘 要
10				
11	1. 本会議	2,170,138		
12	会場費	810,425		施設使用料 (リンクステーション青森)
13	会場費	324,940		施設使用料 (ホテル青森)
14	記録 (写真・動画撮影編集)	561,000		記録：映像、写真撮影、編集
15	印刷・製本・看板製作費	60,500		事前配布、当日配布会議プログラム印刷等
16	講演者謝金	301,460		講演者 (千葉すず様)、交通費
17	賄料	92,013		スタッフ弁当、飲料ペット
18	委託費	19,800		会場交通整理 (シルバー人材センター派遣)
19	2. 懇親会費	3,651,150		
20	japan night	2,922,550		ホテル青森 (料理、飲み物、サービス料)、出し物、イベント
21	Governor night	427,600		百代、郷土芸能、歌謡ショー
22	Rijyem night	301,000		ねぶたの館たかく、
23		0		
24	3. 記念品・お土産等・賞品	92,000		
25	日本語スピーチコンテスト賞品	92,000		こけし6体
26				
27		0		
28		0		
29	4. 学生エクスカーション	38,180		
30	入場料	38,180		ねぶたの家ワラッセ、観光物産館アスパム
31		0		
32	5. 事務費	191,880		
33	実行委員会	12,240		郵送費 (県内高校パンフ郵送)
34	↓	100,000		ホテル予約システム整備費
35	↓	19,360		実行委員会会議室 (ホテル青森)
36	↓	22,000		開催広報用動画編集
37	事務費	37,400		資料バッグ (コンベンションバッグ)、その他
38	振込手数料	880		
39				
40	支出金額合計	6,143,348		
	収支差額	564,452		

文責：RIJYEM 事務局